

インプラント・バブル，バッシング，その後

関 根 秀 志

奥羽大学歯学部では、従前より、歯科補綴学講座はもとより、口腔外科学講座、歯科保存学講座を中心に臨床系・基礎系の多くの専門分野の方々が携わり口腔インプラント学教育、附属病院でのインプラント臨床が実施されてきております。さらに、昨年平成26年4月より、歯科補綴学講座の冠橋義歯学、有床義歯学に加え、口腔インプラント学が専門領域として加わりました。学内で口腔インプラント学は「歯の欠損に対する咬合の回復」を科学する講座に組み込まれましたが、奥羽大学におけるこれまでの取り組みと同様に、多領域連携型の包括的な学問であると考えられます。また、様々な分野の専門家が集い、ディスカッションしながら最良を目指す、出会いの多い領域と考えられます。

現在、主に使用されているオッセオインテグレートッドインプラントは、臨床応用の開始から40余年、本邦に導入されてからすでに30年あまりを経過しております。その間、インプラント治療に関する高い治療成績が多数報告され、ブリッジや可撤性義歯による咬合回復に加えてインプラントの応用頻度が高まっています。わたくしたちが手にするインプラント体やコンポーネント、さらに術式・器具にいたるまでさまざまな開発がすすめられ、日ごとに発展を続けています。なかでも、2000年代に入ってからからの広がりスピードは、他に類を見ないものでした。歯科器材・用品年鑑を紐解くと、特に1998年には約80億円規模であったインプラント関連市場は右肩上がりに増加し、2008年には320億円にまで拡大したとされています。この時期にはインプラント治療に対する正確な知識の普及が遅れ、インプラント治療は「第二の永久歯」、「一生使うことが可能」、「夢のような治療法」などという誤った社会的評価が生じていました。

インプラント療法には高い治療効果が期待できます。しかしながら、インプラント治療を受けた患者さんが増えるにつれ、治療結果に満足されていらっしゃらない患者さんも存在しました。歯科医療施設で問題が解決できない患者さんの声が注目されるようになり、インプラント治療術後の不具合が表面化されることになりました。2007年に起きたインプラント埋入手術に関わる患者さんの死亡事故をきっかけに、インプラント治療に対する批判が雑誌・テレビなどのマスコミ各所で相次ぎました。2011年には、独立行政法人・国民生活センターが「歯科インプラント治療により危害を受けた」という相談の急増から実際をまとめたレポート「歯科インプラント治療に関わる問題—身体的トラブルを中心に—」が報道発表され、心無いインプラント治療に対する批判が更に高まることとなりました。インプラント治療に対する評価は一変し「危険な治療」、「事故が急増」、「原因は知識・技術不足の歯科医師」という偏ったものに急激にシフトしました。

1998年に福岡歯科大学に日本初の独立した口腔インプラント治療の組織が開設されました。その後、歯科大学・歯学部には次々とインプラントを専門とする組織が設置されています。また、2005年には医歯薬出版株式会社から口腔インプラント学の教科書として「よくわかる口腔インプラント学」が出版され、「口腔インプラント学」教育の定着の足掛かりとなりました。歯科医師国家試験への出題数も徐々に増えてきています。

さらに、インプラント治療に対する批判への対応として、日本歯科医学会専門分科会の公益社団法人日本口腔インプラント学会は、2012年に「口腔インプラント治療指針2012」を発行しました。加えて、インプラント治療に関わる治療技術向上を目的とした実習器材・システムと実習書を作成し、併せて口腔インプラント用語集を刷新するなど、口腔インプラント学の「学問」としての成熟を後押ししていると考えられます。さらに、公益性のある企画の一環として関連学会・団体による公開講座や市民フォーラムなどでインプラント治療についての正しい知識を国民に対して発信していく場が数多く設けられるようになってきています。

近年、インプラント治療に関する基礎的、臨床的研究は極めて盛んであり、最先端の技術について意義深い多数の報告がなされています。臨床主導で急拡大したインプラント治療からの反省は、「科学的根拠に基づく治療の実践」の重要性の再確認であると考えられます。治療効果に対する裏付けがまだまだ足りない最新技術を、実験的に患者さんに応用することは許されません。その点については、まだまだ明らかにされていない事項は多く、高い治療効果が得られる術前診断の技術を確立するための研究に期待が寄せられています。超高齢社会である本邦では、治療効果はこれまで以上に末永く幅広い評価が求められています。「基本に忠実」な治療の結果を長期にわたって評価する臨床調査のもたらす知見は極めて意義深いものと考えられます。臨床的な治療指針に反映される情報を含む研究への取り組みが求められています。

(奥羽大学歯学部歯科補綴学講座口腔インプラント学)